

じんけん瓦版 第69号

発行日：2018年6月24日

発行：日本聖公会東京教区 人権委員会

「みるく世向かてい」-差別のない平和で豊かな世界に向かって-
ハンセン病市民学会 第14回総会・交流集会 in 沖縄 5/19-20 に参加して

聖ミカエル教会 松田伸剛

「みるく世向かてい」の趣旨は、沖縄におけるハンセン病隔離政策の歴史を振り返りながら、その特徴と沖縄におけるハンセン病問題の現状、克服すべき課題を明らかにしていく。その理由は①現在、熊本地方裁判所で行われている「ハンセン病家族訴訟」の原告568名のうち40%は、沖縄在住の原告であり、沖縄におけるハンセン病差別の現在性とその深刻さをもたらした原因は、ハンセン病隔離政策の歴史に由来しているのではないか。②ハンセン病問題と沖縄の深刻な問題である「平和と基地問題」との共通性を明らかにして、それぞれの解決に向けての課題を探る、とういうものであった。

沖縄におけるハンセン病隔離政策の歴史と特徴

明治維新後、琉球王国は滅亡に迫りやられ、植民地のような、人権が認められない歴史経緯が根底にある。明治時代、ハンセン病は恐ろしい伝染病であると徹底して宣伝しながら、沖縄には療養所が設けられず「放置」され、沖縄におけるハンセン病に対する「排除と迫害」を特に顕著なものにした。太平洋戦争中に、日本軍が沖縄戦に備えて行った「隔離の徹底」が更に、「差別と偏見」を助長した。戦後の米軍統治下において、隔離政策が単に継承されただけでなく、一層徹底され本土以上の隔離収容が行われてしまった。

リレートーク「ハンセン病問題と沖縄の基地問題」>

7名の発言者から次のような思いが語られた。

『社会的マイノリティに特別の負担・犠牲を強いることに、何ら痛痒を感じない社会構造に問題がある。これを支える経済支援で住民は倒錯される』、『ハンセン病証言集に記された父の証言で、差別を受けていた事実を知り衝撃を受けた。沖縄の基地問題もハンセン病の隔離政策も国策であり、弱者へのしわ寄せがくる構図は同じだ』、『2017年、保育園と小学校に相次いで米軍機の部品落下事故が起きた。重大事故以上に深刻なのは、事故直後から誹謗中傷の電話やメールが相次いだ。被害者をさらに傷つけるということがこの社会ではたびたび起きている』、『沖縄の基地は1879年以来の構造的差別であり、ハンセン病の差別・偏見も国家と健常者による構造的差別だ。戦争体験者として、また命を説く者として、戦争につながる基地と偏見打破に取り組むのは義務だ』、『「ハンセン病問題に非当事者はいない。すべての人が差別される側の当事者か、差別する側の当事者だ。」という、ある回復者の言葉に目の鱗をはがされた』等々。

歴史を学ぶということは、次の新たな差別を許さないことに繋がると思う。ハンセン病の歴史を学ぶことは、エイズに対する差別や様々な私たちの身の回りにある差別を許さないということに繋がって、平和な人間関係をつくることに繋がると思う。基地問題も深く学んで、沖縄すべての問題を包み込むように差別偏見をなくすことが出来るように。差別された者も、した者も、赦し赦されて敵のない世界に私たちが生かされるように。

**福島原発事故による自主避難をめぐる人々を描写した
映画「たゆたいながら」を見て**

聖三一教会 森田信也

2011年の東日本大震災による福島原発事故によって自主避難を余儀なくされた福島の人々、監督の阿部周一さんもその一人で当時は高校生でした。この映画は自主避難を余儀なくされた福島市の人々を震災後3年ぶりに故郷へ帰った阿部さんが、知り合いの身近な人びとを訪ね、ひとりひとりの事情と切実な想いをカメラに収めて大学の卒業制作として制作したドキュメンタリーです。



阿部周一監督

人権委員会では「人権週間企画」として、6月2日に映画の上映と製作者の阿部周一さんをお招きしてお話を伺いました。

「たゆたいながら」という言葉はあまり聞きなれない、普段は使われませんが、「たゆたう」は物がゆらゆら動いて定まらない、「ただよう」「心が動揺する」の意味で、映画を見てその言葉を使った意図もわかりました。

映画には、「自主避難した自分(監督)と残った親」「家族は避難させた中で、仕事で残った男性」「障がいのお子さんを抱えて残った母親」「わりきった表情の中で、自給自足の生活続ける農家の女性」など様々な人々が登場します。

福島県外への避難者はピーク時(2012年)で約63,000人、2018年には34,000人とされる。(県発表)一方、自主避難者の数は公表されていません。映画の中では自主避難者を20,000人とする表現があり、「県民200万人の1%しかいない」という主張の一方、「20,000人という数は極めて多

い」という自主避難をめぐる考え方の違いを浮き彫りにしています。

2017年3月に除染によって住環境が整ったとして、福島県は継続していた自主避難者への家賃補助を打ち切りました。映画では「私も福島県民です」と打ち切りの理不尽さを県担当者に訴える場面も描写されています。映画では身近な人々を扱っているが数千倍の人々のそれぞれの人生や苦悩があること、そしてそれはまだ現在進行形であることを再認識させられました。

自主避難ではなく、避難区域でも除染や復興住宅の整備により住民の帰還が促され、帰還が進んでいると報道されています。しかし、若年層を中心に帰還しない(できない)現実があります。私も帰還が進む南相馬市に数年間ボランティアに行きましたが、依頼者の多くは高齢者でそれまで自分でやったり、集落で助け合ってきた敷地の管理(伐採や除草)です。

放射能の除染も集落や農地などに限られ、広大な森林は手つかずです。映画でも取り上げられていた、各所に積み上げられていた除染による「汚染物質・土壌」は県内に暫定的とされる「中間貯蔵施設」に集積されていますが、最終処分は決定していません。



福島第一原発水素爆発

ましてや高線量廃棄物処理(原発建屋、本体を含む)には少なくとも数十年を要するとされます。

原発事故から7年が経過し、ほかの地域ではなく、

福島でも「風評(被害)」の怖さから「風化(被害の)」が進んでいて、事故のことをよく知らないこどもたちもいるそうです。

日本聖公会では2012年5月に『第59(定期)総会声明 原発のない世界を求めて -原子力発電に対する日本聖公会の立場-』を発信、「原発問題プロジェクト」を継続しています。こどもたちを対象としたリフレッシュプログラムや除染支援、仮設住宅支援(いわき市、新地町その他)などです。2016年には鹿児島県川内原発の再稼働への抗議声明を出しています。東京では「聖公会東京311ボランティアチーム」が自主避難の方への支援、こどもたちの場所提供「つきしまキッズデイ」などが継続されています。

聖公会総会の声明は原発の問題点を「神によって造らねたいのちを脅かす」「神によって創造さ

れた自然を破壊する」「神によって与えられた平和なくらしを奪う」という視点から指摘し、「原発のない世界を求めて」として以下の言葉で締めくくっています。

私たちは教派・宗教を超えて連帯し、原子力発電所そのものを直ちに撤廃し、国のエネルギー政策を代替エネルギーの利用技術を開発する方向に転換するように求めます。そのために、利便性、快適さを追い求めてきた私たち自身のライフスタイルを転換することを決意します。苦しみや困難を抱える人々と痛みを分かち合い、学び合い、愛し合い、支え合って生きる世界を目指します。

神がこの地を祝福し、地の平和を取り戻してくださいように。

~~~~~

## 東京同宗連総会記念講演を見て

月島聖公会 植田栄基

毎年6月初めに開かれる東京同宗連総会の後に記念講演が行われます。今年は俳優座劇団員の有馬理恵さんに依頼して「いのちをみつめて」(お芝居とお話)と題し、水上勉作「釈迦内<sup>しやかないひつぎうた</sup> 唄」を20分程にまとめた一人芝居とお話を聞く機会を持ちました。通常5、6人で上演される芝居を一人で、しかも短く演じられたのですが、巧みな語りによって、目前にはっきりと場面が浮かび上がって来ました

舞台は秋田県大館釈迦内、しげたふじこが亡くなった父親の火葬のために掃除をしていた3つ並ぶ真ん中の釜から出て来るところから始まります。村中で亡くなった人々はこの家族によって骨にされ、家族に返され、朝鮮から連れて来られ仕事をしていた人や、身寄りのない人の埋葬もします。父親との思い出、母親の仕事ぶり、出て行った姉達の事等が思い出すままに語られます。父が釜の中の灰を撒いたところあちこちからコスモスが群生し生前の貴賤を問わず新しい命が芽生え咲き誇る景色は圧巻です。芝居の内容、セリフを全てお

伝えする事は出来ませんが、どこかで上演されるのを観て頂けたらとおもいます。

有馬さんがこの芝居と出会ったのは高校生の時でした。和歌山の皮革工場がひしめく地域で生まれ育ち、小学校の卒業式には「差別に立ち向かい差別を無くす人になります」と言って巣立って行く子供の1人でした。橋を渡った所にある中学に進学し、家に遊びに来た友達が橋を渡った途端「臭一っ」と言い、大人がそれを差別と批判し、自分は差別されて居る者なのかと自覚する事になりました。有馬さんは思った事を口にしただけの友達に差別だ!と言うのでは無く、地域の成り立ち、仕事の大切さについて話してくれたら良かったのにと言われました。

母方の祖母の見舞いに言った時、自分だけが玄関に入れて貰えなかった事などから、差別に対する恐怖に囚われていた時、この芝居を観て、人から忌み嫌われ差別の中にあっても、誠実に生きて行くふじこの姿は有馬さんに力をあたえ、祖父母に手紙を出しやっとうことが出来たのでした。

ずっと会えなかった事、何故入れてくれなかったのかと質問する有馬さんに祖父は、頭の中に悪魔と天使がいて悪魔が勝ち続けていたのだと言って、泣いたそうです。その後は良好な関係が保たれました。

与えられた命を精一杯生きている全ての人が、お互いにあるがままに認め合う世界を求めて、有馬さんの500回になろうとする、芝居の上演は続きます。

~~~~~

聖公会・カトリック合同企画

布川事件を通して、冤罪・再審問題を考える

お話：桜井昌司さん（布川事件えん罪被害者）

日時/場所：6月30日（土）14：00～16：00 / 池袋聖公会-豊島区西池袋 5-24-5

主催/問合せ：日本聖公会有志「一羊会」 / 森田麻里子 e-mail. thepuls@jcom.home.ne.jp

共催：日本カトリック正義と平和協議会

正義と平和協議会・信仰と生活委員会共催 講演会

リグリマ・ジャパン協力

あなたたちも寄留者であった

—在日コリアンとバングラデシュ 少数民族ガロの結びつきから—

お話：金性済（キム・ソンジェ）牧師

日本キリスト教協議会 総幹事（在日大韓基督教会）

日時/場所：7月21日（土）14：00～16：00 / 池袋聖公会-豊島区西池袋 5-24-5

問合せ：東京教区正義と平和協議会議長（井口司祭 TEL:090-1265-5901）

守大助さん—仙台北陵クリニック・筋弛緩剤えん罪事件

2/28、仙台高裁は、突然、再審棄却の不当決定を下しました。

守大助さんから切実な訴えの手紙が来ています。

闘いの舞台は、最高裁へ移りました。特別抗告審で!!

「差し戻し」させるため、私は無実を訴え闘います。

絶対に筋弛緩剤を混入していません。無実です。

全国の皆さん、今後も どうか ご支援を宜しくお願い致します。

……………中略……………

私はやっていません。両親が元気な内に帰りたいです。

全国から最高裁へ、「再審開始」の風を吹かせて下さい!!

勝利するため、皆さんのお力をお貸し下さい。助けて下さい。

無実の守大助

* 守大助さんを手紙で

支えてください

〒264-0023

千葉市若葉区貝塚町192

守大助 様